



Title	『源氏物語』における連体修飾表現の解釈について
Author(s)	鴻野, 知暁
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』における連体修飾表現の解釈について

鴻野 知曉

1. はじめに

日本語学研究であれ文学研究であれ、古語の研究を行う者にとって、テキストを正確に解釈し理解するというのは基礎的かつ重要な作業である。解釈の作業を通して、語学および文学的問題を発見できることもある。しかし我々は、「いく通りかの解釈の可能性が考えられるが、どれを採るべきかわからない」、「文字通りには理解できるが、具体的にどういうことなのか腑に落ちない」など、正確な解釈に至らないことがある。この度合いとしては「前後の文脈からおおよそ検討がつくが、自信が無い」というものから「理解の手がかりすらつかめない」というものまで、さらには「当該箇所が解釈が難しいことに無自覚であり、自らの解釈の誤りにも気づかない」という場合もある。

本稿では、単語と単語が結びついた、構造的に単純なものとして「連体修飾句＋体言」（以下、「連体修飾表現」と呼ぶ）を取り上げ、『源氏物語』中で解釈上注意を要するいくつかの例を検討する。解釈の結果としては、注釈書類の訳にことさら異を唱えるわけではないが、古語の正確な解釈に至るまでの道筋について具体的に示したいのである。

2節で本稿の手法を提示し、3節で用例の収集方法について簡単に触れた後、4節では「連体修飾表現」を解するのに必要な文法事項を示す。5節は解釈上注意を要する連体修飾表現の具体例である¹。

2. 本稿の手法

現代人としての言語感覚を下手に持ち込まず適切に古語の解釈を行いたいという場合に、「類似の用例を当該作品の中で、もしくは他作品を含めて探し、比較・検討する」という手法がしばしば有効である。和歌に関するテキストでは、本歌取・引歌の表現技法が頻繁に使用される²ため、「類似の表現を探す」ということはテキストを理解するための常套手段である。ただ、引歌の修辞を使用しているわけではない一般の散文にこの手法を適用するには、一工夫が必要である。具体的には以下のようなことが考えられる。

- (a) 当該表現と同じ語連鎖（単語と単語の組み合わせ）を探す。
- (b) 表現の一部を、類義語や関連語に変えて調べる。
- (c) 文法的に同様の構文や、関係のある構文について調べる。後者について、たとえば、「連体修飾句—体言」に対して、「連用修飾句—用言」の文を調べる。また、意味的に主述関係にある「連体修飾句—体言」に対して、「主語—述語」の文を調べる。

(d)当該箇所と同様の場面(背景)で使われている例はないか探す。

このように収集した用例を付き合わせて、整合性が高く妥当な解釈は何であるかを考察するのである。なお、北山(1962)は「しばしば出て来る、応用範囲の広い語句語法の、一見平易そうに見えて、而も、うっかりすると誤解するようなのを採り上げるように留意した」(まえがき)という方針のもと、豊富な類例を挙げて、正しい解釈に至るまでの思考過程を示しており、大変参考となる。

3. 用例の収集方法

用例を集める主な手段として、以下のものがある。

- (a)テキストを自分で通読する中で見つける。
- (b)出版されている索引類を使う。
- (c)電子テキスト中の文字列について、テキストエディタなどを用いて検索する。
- (d)品詞情報などの付与されたコーパスを利用する。

(a)は地道で時間はかかるが、古文を実際に読む中で読解力が付き、また、作品の全体像を見渡すことができるという大きな長所がある。(d)に関して、国立国語研究所で構築・公開されている『日本語歴史コーパス』が大規模な通時コーパスであり、日本語学研究で必要とされる主要な資料をほぼ網羅している有用なものである(本稿でもこのコーパスの検索条件を適宜述べる)。ただし、コーパスによって目的の語句・表現を網羅的に調べるのはある程度の技術を要するので、(a)~(c)の手段を併用するとよいであろう。どの手段で用例を収集するにせよ、前後の文脈をなるべく広く見渡し、前後数十語、場合によっては前後数文を電子データやカードにまとめることが重要である。

4. 連体修飾表現を解釈するのに必要な文法事項

連体修飾句と被修飾語の間の意味関係について、誤って解釈されがちであるものが先行研究によって指摘されている。ここでは二つを挙げる。

まず、小田(2015:322)で『『~の』『~に対する』が補われる連体修飾』と呼ばれるものがある(北山1951:94も参照のこと)。

- (1) あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてんや。(源氏物語、若紫1-214)

「御後見」と「幼き」は主述関係ではなく、「御後見が幼い」と解するのは誤りである。正しくは、「幼い人に対する御後見」の意である。

次は、小田(2015:323)で「判断内容を表す連体修飾」とされるものである(北山 1951:89も参照のこと)。

(2) 亡き人にすこし浅き咎は思はせて、(源氏物語、夕霧 4-461)

「咎が浅い」と解するのは誤りであって、正しくは、「思慮が浅いという非難」の意である。

『への』『～に対する』が補われる連体修飾、「判断内容を表す連体修飾」が連体修飾表現全体に占める割合は決して多いとは言えないが、解釈に大きく関わるので注意を要する。北山(1951)ではほぼ網羅的に挙例されているので、まとめて目を通し、有名な例は暗記してしまうのが学習上有効である。

5. 解釈上注意を要する例の考察

5.1 「恥づかしき」＋名詞

まず、本節で多義語に関わる連体修飾句の解釈について考える。周知のとおり、古語の「恥づかし」は、①「(自らの欠点などについて) 気恥ずかしく思う、きまりが悪い」、②「こちらを気後れさせるほど相手が優れている」の二種の意味に分かれる。

(3) 姫君(＝末摘花)は、さりともと待ち過ぐしたまへる心もしるくうれしけれど、いと恥づかしき御ありさまにて(源氏に) 対面せんもいとつつましく思したり。(源氏物語、蓬生 2-349)

(4) 姫君(＝玉鬘)は、いと恥づかしき御ありさまどものさし集ひ、つつましきに、え聞こえたまはねば、(源氏物語、行幸 3-317)

これらはいずれも「恥づかしき御ありさま」の後に、「つつまし」(気が引ける)という語が続いているが、「つつまし」という感情を抱くこととなった原因は異なっている。(3)では、末摘花自らの格好がみすばらしいことが原因であるのに対して、(4)では、姫君と一緒にその場にいる他者(具体的には内大臣と源氏)があまりにも立派であることが原因である。すなわち(3)での「恥づかし」は先の①の意味で、(4)でのそれは②の意味で、それぞれ使用されている。

このように「恥づかし」に後続する名詞が、「恥づかし」の意味を決定するに至らないこともあるが、一方で、後続する名詞によって「恥づかし」の意味がいずれかに絞られてくるということもある。

「(物・心) 恥づかし」が「人」を修飾する表現は、『日本語歴史コーパス 平安時代編』に15例(源氏物語に9例、枕草子に4例、落窪物語に1例、堤中納言物語に1例)存在する³が、すべて「気のおける人」、「こちらが気後れするくらいに立派な人」の意味である。一部を以下に挙げる。

- (5) はづかしき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる、われながらうれし。(枕草子 389)
- (6) 御供なる人、「これなん、なにがし僧都のこの二年籠りはべる方にはべるなる」、(源氏)
「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞き
もこそすれ」(源氏物語、若紫 1-201)
- (7) 宮も、「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして見えたてまつらせたまへ」と
聞こえたまひけり。(源氏物語、絵合 2-373)

(5)は、こちらが気後れするほど優れた人が歌の上の句・下の句を尋ねてきたところ、(相手を失望させることなく) 答えられたので嬉しいということである。(6)は「なにがし僧都」が立派な人であるから、やつした姿でいる自分(源氏)のことを聞きつけては困る、という文脈である。(7)は、「このように気の置ける、やんごとない人が参上されるのだから、よくよく気を配ってお会いになられるように」という忠告である。

現代語では「恥づかしい+人」という結びつき自体、普通には使われないし、古語のように「立派な人」の意味には決してならない。これはもちろん現代語と古語との意味の相違によるのだが、逆に言えば古語に特徴的に見られる単語と単語の結びつき(コロケーション)の調査・検討を通して、古語(今の場合「恥づかし」)の意味をいっそう的確に理解できることが期待される。

別の例として、「まみ(目見)」を挙げよう。これには「目元」のほかに「目つき、まなざし」の意味がある。「(物・心)恥づかし」が「まみ」を修飾するものは、『日本語歴史コーパス 平安時代編』に3例認められ⁴、全て『源氏物語』の例である。意味がとりやすい例を以下に引く。

- (8) (源氏)「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、(葵の上の様子)例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。(源氏物語、葵 2-39)

「例は」が「いとわづらはしう恥づかしげなる」に係っていることに注意したい。「わづらはし」と「恥づかしげなり」が類義であり、「恥づかし」は先の②の意味である。「恥づかしげなる御まみ」は「こちらが気後れするほどの(気高さを感じさせる)まなざし」と解釈される⁵。しかし、今は普段とちがって、葵の上は物の怪に取りつかれて「たゆげ」であり、その様子に源氏はいとおしさを覚えているのである。

ここまでは連体修飾語と被修飾語の意味について考えてきたが、「まみ恥づかし」といった「主語―述語」の構造に考察を広げてみよう。『日本語歴史コーパス』には文法関係の情報は付与されていないが、語形「%ハズカシ」の前方に語彙素「マミ」が共起するものを探することで、間接的にこれを調べることができる。短単位検索で、語形「%ハズカシ」の前方5語以内に語彙素読み「マミ」があるという条件で調べると、平安時代編で5例ヒットし、全て『源氏物語』の例である。

- (9) (薫の様子) 頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに恥づかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、…宮にも似たてまつらず、今より気高くものものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ。(源氏物語、横笛 4-349)
- (10) (六の君) 色あひあまりなるまでにほひて、ものものしく気高き顔の、まみいと恥づかしげにらうらうじく、すべて何ごとも足らひて、容貌よき人と言はむに飽かぬところなし。(源氏物語、宿木 5-419)
- (11) からうじて、(源氏に対して)「問はぬはつらきものにやあらん」と、(葵の上が) 後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。(源氏物語、若紫 1-226)

それぞれ、波線部で対象の気高さが叙述されており、いずれの例でも「恥づかし」が先の②の意味であることは明らかである。(11)の「恥づかしげ」は目元の静的な形容というよりは、「後目に見おこせたまへる」という行為に伴ったものであり、流し目だけで人を圧倒する葵の上の人となり強く印象づけられる⁶。(11)での「まみ」は「まなざし」といった意味がふさわしい。他の例を見ても、『源氏物語』の「まみ―恥づかし」という語の結びつきは「目つきが恥づかしそうだ」ということではなく、「容貌に気品・威厳があり、その高貴さが目元・まなざしにまで表れて他者を緊張させる」ということを表している。すなわちこれらの語の結びつきにおいて「恥づかし」の意味は②に著しく偏っているのであり、貴人の持つ「目の力」というものが『源氏物語』の中で幾度も取り上げられ、描かれているわけである。

5.2 「かくおはしましたるよろこび」

次に、多義であることがそれほど知られていない語に関する例を見よう。夕顔の帖の最初に以下のような箇所がある。

- (12) 惟光が兄の阿闍梨、婿の三河守、むすめなど渡り集ひたるほどに、(源氏が) かくおは

しましたるよろこびをまたなきことにかしこまる。（源氏物語、夕顔 1-137）

下線部について「（源氏が）このようにいらっしゃったという喜び・嬉しさ」と訳してしまいそうなところであるが、注釈書はこれとは異なる訳を与えている。下線部以降の箇所についていくつか引用すると、「お光来の御礼を、無上の光榮と、一同恐懼して申し上げる」（角川書店『源氏物語評釈』）、「君がこうしてお越しくくださったことのお礼を、無上の光榮と恐縮して申しあげる。」（小学館『新編日本古典文学全集』）、「こうして（源氏が）おいでになっていることへの感謝の意をこの上ないことと恐縮して申し伝える。」（『岩波文庫』、2017年刊行版）となっている。

「よろこび」と「かしこまる」がここで注意を要する単語である。まず、「かしこまる」は「恐縮している」の意から、それを行動に表した「恐縮して（お礼を）言う」の意が生じる。そして、「よろこび」には「嬉しく思うこと」のほかに「お礼」の意味がある。それぞれの語での多義性は連続するものではあるが、文脈によって後者の意味に定まってくる場合もある。

(13) (帝)「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」（源氏物語、桐壺 1-34）

「連体修飾句＋よろこび」は文法的には「～であることを嬉しく感じること」の他に、「～という行為に対する御礼」（「～の」「～に対する」が補われる連体修飾）の可能性があると注意されたい。そして、この文脈では、前者の意味にとると明らかに不自然で、後者の意味ととるしかない。宮仕えの宿願をよく守ったことに対するお礼として、「かひあるさまに（更衣の地位を上げよう）」と思っていたが、それは実現しなかったということである。

貴人が病人を見舞いに来るといふ、(12)と同様の場面で「連体修飾句＋よろこび」が使われた例もある。

(14) かく、これかれ参りたまへるよし聞こしめして、（源氏）「重き病者のにはかにとちめつるさまなりつるを、女房などは心もえをさめず、乱りがはしく騒ぎはべりけるに、みづからも、えのどめず心あわたしきほどにてなむ。ことさらになむ、かくものしたまへるよろこびは聞こゆべき」とのたまへり。（源氏物語、若菜下 4-240）

「参りたまへる」「かくものしたまへる」は病人を見舞いに来たことを指す。「かくものしたまへるよろこび」は「聞こゆ」の目的語になっている。「ことさらに」（また別途、改めて）という語が使われているから、「このようにいらっしゃったという嬉しさを申し上げる」で

は不自然で、「このようにいらっしゃったことへのお礼を申し上げる」と解釈するのが適切である。これと同様に(12)もやはり、「～に対するお礼を～恐縮して申し上げる」と訳するのが妥当であると考えられる。

5.3 「静かなる思ひ」

ここでは次例の下線部の解釈について検討したい。現代人の感覚からすると「穏やかな気持ち」と受け取ってしまいそうであるが、果たしてそうだろうか。

- (15) 思ひ棄てたまへる世なれども、今はと住み離れなんを（八の宮は）あはれに思さる。網代のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかがはせん。…かく絶え籠りぬる野山の末にも、昔の人ものしたまはましかばと思ひきこえたまはぬをりなかりけり。（源氏物語、橋姫 5-126）

『源氏物語』中、「静かなる思ひ」という表現は他に2例ある。

- (16) (夕霧)「…『かく朝廷の御後見を仕うまつりさして、静かなる思ひをかなへむと、ひとへに籠りぬし後は、何ごとをも知らぬやうにて、故院の御遺言のごともえ仕うまつらず、…今、かく政を避りて、静かにおはしますころほひ、心の中をも隔てなく、参りうけたまはらまほしきを、さすがに何となくところせき身のよそほひにて、おのづから月日を過ぐすこと』となむ、をりをり嘆き申したまふ」など奏したまふ。（源氏物語、若菜上 4-23）
- (17) 宮（八の宮）、「…ただ、厭ひ離れよと、ことさらに仏などの勧めおもむけたまふやうなるありさまにて、おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど…」（源氏物語、橋姫 5-132）

「静かなる思ひ」が関わる述語動詞を見ると、「～にかなはぬ」、「～をかなへむ」、「～かなひゆけど」となっており、「思ひ」は「気持ち」というより、「願い・望み」と取る方が適切である。(15)では「耳かしがましき川のわたり」のせいで、「静かなる思ひ」が十分には達し得ないが、仕方がないということである。

さらに、これら下線部の連体修飾語と被修飾語との関係についてみると、文法的に「判断内容を表す連体修飾」ととることができ、「静かに（何かをしたい）」という願い」と解釈することが可能である。それでは、「願い」の具体的な内容は何であろうか。

これらの文脈を確かめると、(17)の話し手は、仏の勧めるにしたがって厭世的な暮らしを送っている。(15)では、八の宮が俗世を見捨て、世間との交わりを絶って野山に籠もってい

るということが書かれており、仏教的精神が見てとれる。(16)は政権を離れた後の源氏の意向について、夕霧が朱雀院へ伝えているところであるが、ここでも「籠りゐし」という言葉によって俗世からの離脱、仏教的な隠遁が示唆されている。

ところで、「静かに」が連用修飾句として使用される例を調べてみると、(15)–(17)と同様に仏教的な隠遁に関わっているものとして、以下が見つかる。

(18) 静かに籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん (源氏物語、絵合 2-392)

(19) 母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、(源氏物語、匂兵部卿 5-23)

これらでは「仏道修行をする、勤行する」ということが明示的に表されている。(15)–(17)の例では「静かに何をするか」という具体的な内容は表現されていないが、(18)–(19)と同様に「仏道に励む」と考えられる。すなわち(15)–(17)の例の下線部を言葉を補って訳すと「俗世から離れて、静かに仏道修行に励みたいという願い」となるわけである。

なお、類似の表現として「静かなる(御)本意」(源氏物語中 3 例)がある。

(20) (源氏)「…しか(＝出家をしよう)と思ひたまふことはべりながら、もの騒がしきやうに、静かなる本意もなきやうなるありさまに、明け暮らしはべりつつ、みづからの勤めにそへて、いま静かにと思ひたまふも、げにこそ心幼きことなれ」(源氏物語、鈴虫 4-390)

下線部以降では、源氏が「静かなる本意(静かに俗世を離れて仏道修行したいという望み)」をなかなか叶えられないが、源氏自らの勤行に加えて、秋好中宮の母のことも静かにお祈り申し上げたいと述べられている。

現代人の感覚からすると、「静かに～したい」ということが具体的に「静かに仏道修行をしたい」に結びつくこと自体、なかなか思い至らないだろう。以上の例は物語の根底に仏教的思想があることをよく示すものである。

5.4 「憎き心」

現代語と古語で、基本的な意味は共通するが、微妙な語感において異なる場合がある。古語の「憎し」は、「好ましくない、気に入らない」といった意味であり、現代語の憎悪のような強い感情を表すわけではない。「感情的に好ましくないさま。不快だ。嫌いだ。古くは、憎悪の情は強くない。」(角川書店『角川古語大辞典』、「にくし」の形容詞①)、「本来、現代語の「にくい」ほど積極的な嫌悪の情が含まれていなかった。」(小学館『日本国語大辞典』第2版、「にくい」の補注)と述べられるとおりである。

さて、古語で「憎き心」、「憎き御心」という表現がある。『日本語歴史コーパス 平安時代編』の中には8例が見つかる（源氏物語に6例、大和物語に1例、落窪物語に1例）⁷。以下ではこの表現の内実を探るが、まずは『源氏物語』以外の例を見てみよう。

(21) よしいゑといひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり。これがもとの妻のもとに、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心なく、いとよく語らひてゐたりけり。（大和物語 358）

(22) 「…中将はいと憎き心ある人ぞ。な思ひたまひそ」とて、笑ひたまへり。（落窪物語 198）

(21)では「心いとよく」と「にくき心なく」はおおよそ同じことを表しており、「気性・気立てが良い」くらいの意味である。(22)では「中将はたいそう性格が良くない人だ」ということが、あくまでも冗談交じりに述べられている。これらの例には「誰かを憎いと思う心」という訳は当たらない。次に『源氏物語』における例を見よう。

(23) (源氏)「右大臣の北の方(＝玉鬘)の、とりたてたる後見もなく、幼くよりものはかなき世にさすらふるやうにて生ひ出でたまひけれど、かどかどしく労ありて、我もおほかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐし…」(源氏物語、若菜下 4-260)

「玉鬘のことを、源氏が親のようにして育ててきたが、源氏が『憎き心』を起こさぬわけでもなかったのを、玉鬘はやんわりと受け流して相手にはせずに過ごしてきた」という文脈である。この「憎き心」も「誰かを憎いと思う心」と解釈すると明らかにおかしいのであるが、(21)や(22)のように漠然と人の気立てや性格を指すのとは異なって、(23)ではもっと個別的・特定の心の持ちように対して「憎き」と言われている。それは具体的には、源氏が玉鬘へ抱いていた恋情であり、源氏自らが「よからぬこと」と感じるものである。すなわち下線部は「抱いてはならない、けしからぬ恋心」と理解されるのである。『源氏物語』の他の例を検討する。

(24) 御前駆の声の遠くなるままに、海人も釣すばかりになるも、我ながら憎き心かなと、思ふ思ふ聞き臥したまへり。（源氏物語、宿木 5-413）

(25) (中の君)「…今は、ただ、この憎き心添ひたまへる人のなだらかにて思ひ離れなば、さらに何ごとも思ひ入れずなりなん」と思ほす。（源氏物語、東屋 6-70）

(26) また頼もしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君をぞよろづに頼みきこえたまへるに、なほこのにくき御心のやまぬに、ともすれば（藤壺が）御胸をつぶしたまひつ

つ(源氏物語、賢木 2-107)

(27) 憎き御心こそ添ひたれど、さりとて、御心のままに押したちてなどもてなしたまはず、いとど深き御心のみまさりたまへば、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ。(源氏物語、篝火 3-256)

(24)で、「我」は中の君を指し、「心」は具体的には「自分(中の君)が匂宮のことを愛する心」である。海人も釣するほどに涙があふれてきたので、自分のあまりの執心を「憎き」(いけないことだ)といましめている。(25)は、自分(中の君)に薫が愛情を注ぎ執着していることを、中の君が「憎き」と感じているということである。(26)では、光源氏の藤壺への執心が背景にある。藤壺はほかに頼れる人がおらず、源氏のみを万事頼りとしているのだが、同時に、光源氏の執心がやまないことに藤壺が悩んでいる、という場面である。「にくき御心」は「悩ましいご執心、悩みの種となるご執心」と理解される。(27)は地の文であり、源氏が養女として引き取っている玉鬘に対して恋情を抱くことを「憎き御心」と述べている。(27)は(23)のかなり前の場面であるが、源氏の玉鬘への恋情という同じテーマに基づいていることに注意されたい。

このように『源氏物語』の「憎き心」は6例中5例⁸が「誰かが誰かに恋心を抱くこと、また、執着していることに対して、好ましくない、いとわしいものだと思う。特に世間的には認められない、道ならぬ恋に関する場合もある」という共通した具体性を有し、特別な意味合いを帯びている。そしてこの点で、他作品の(21)や(22)とは異なるのである。

5.5 「おほけなき心」

前節と関連して、『源氏物語』の中で他作品とは異なった特別な意味合いを有しており、しかもそれが現代の我々にとって容易には想像しがたいという表現を取り上げよう。

(28)この御方(＝紫の上)をば、何ごとも思ひ及ぶべき方なく、(夕霧が紫の上に対して)け遠くて年ごろ過ぎぬれば、いかでか、ただ、おほかたに、心寄せあるさまをも見えたてまつらんとばかりの、口惜しく嘆かしきなりけり。(夕霧は)あながちに、あるまじくおほけなき心などはさらにものしたまはず、いとよくもてをさめたまへり。(源氏物語、若菜下 4-194)

「ただ、おほかたに、心寄せあるさまをも見えたてまつらん」は、「(男女の関係というわけではない)ただひととおりの好意を抱いていることを紫の上に知っていただきたい」ということである。「おほけなき心」はひととおりの好意などではない、「分不相応の恋心」、「身のほど知らずの恋」と一応は解される。こう訳すると、我々の現代的感覚からは、男性(こ

の場合夕霧)に比べて女性(この場合紫の上)の身分が高いということが想像される。しかし、このイメージを古代の例にそのまま適用するのは妥当であろうか。『源氏物語』の他の例も含めて考えよう。

『日本語歴史コーパス』の短単位検索で、『源氏物語』に出現する語形「オオケナシ」を調べると 29 例が見つかる。「若菜下」とそれに続く「柏木」の帖とで半数の 14 例を占めている。続いて、「おほけなし」が「心」を修飾する例を調べると、『源氏物語』に 14 例存し、そのうち、「若菜下」・「柏木」の帖に 9 例がある⁹。『源氏物語』の「おほけなき+心」の用例を見ていくと、「誰かが誰かに対して愛情を抱くこと」という点で共通している。「若菜下」の帖から、2 例を引こう。

(29) (柏木)「…ただ、かくありがたきものの隙に、け近きほどにて、この心の中に思ふことのはしすこし聞こえさせつべくたばかりたまへ。おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」とのたまへば、(小侍従)「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつけきことをも思しよりけるかな。なにしに参りつらん」とはちぶく。(源氏物語、若菜下 4-220)

(30) (源氏)「まして、これは、さま異に、おほけなき人の心にもありけるかな、帝の御妻をも過(あやま)つたぐひ、昔もありけれど、それは、また、いふ方異なり、…」(源氏物語、若菜下 4-254)

(29)は、柏木が小侍従に頼んで、女三の宮(源氏の正妻)に近づこうとする場面である。柏木は「おほけなき心」などではないと弁解をするが、小侍従はこれよりも「おほけなき」となどほかにはないと言う。「おほけなき心」に関して「いと恐ろしければ」「むくつけき」と、恐れ・恐怖が強調されているのに注目したい。「若菜下」そして「柏木」の帖に流れているのは、柏木が女三の宮と密通し、それが由々しき事として意識され、源氏に発覚することの恐れである。これらの帖において「おほけなき心」が繰り返し言及されるのである。(30)は(29)より後の場面で、柏木と女三の宮との密通が源氏に発覚し、その事の重さについて源氏が思いを巡らせるところである。源氏は「おほけなき人の心」から、帝の御妻とあやまつて関係を持つ例を思い起こしている。

次は『源氏物語』の中で初めの方に位置する夕顔の帖の例である。

(31) 命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、(源氏物語、夕顔 1-169)

夕顔が物の怪にとりつかれ、源氏自らも危うくなったことについて、源氏が「どういった因縁でこのような目を見るのか」と省み、「おほけなくあるまじき心の報い」であると思に至る。これが源氏とどの女性との関係についてのものなのか、ここでは明かされない。この怪異の因縁となってしまうような、ただならぬ思いであることがほのめかされるだけである。これは重大な伏線として機能しており、後の帖を含んで読むと、桐壺帝の妻である藤壺との密通につながるものであることがわかってくる。

『源氏物語』のこれらの例を見てみると、「おほけなき心」は単なる男女二人同士の問題ではなく、「密通」が関わっていること、また、しばしば恐れにつながる重大なものとして描かれていることがわかってくる。そして女性単身の身分の高さというよりむしろ、その女性の配偶者のやんごとなさこそが、「おほけなき(分限を超えた)」という表現につながっているのだと考えられる。

今西(1998:15)では、「おほけなし」という語について、『うつほ物語』と『源氏物語』が比較され、それらの意味に変容があるという重要な指摘がなされている。以下に引用する。

『うつほ物語』の求婚者は身の程知らずにも高嶺の花、あて宮に懸想した。けれども所詮それだけの話である。彼らの「おほけなし」には叶えられぬ片思い以上の何ものもなく、もとより密通などという関係は生じようがない。加えて『うつほ物語』の求婚者にとってあて宮への懸想が身の程知らずの振る舞いであつたとしても、少なくともその懸想には禁忌は存在しなかった。(中略)それにたいして源氏の「おほけなし」は、父帝の配偶者(引用者注:藤壺のこと)にたいする恋という、父子関係への裏切りである。しかもそれが密通という現実をとまなう。

『源氏物語』における「おほけなき心」は、他の作品とは異なる固有の意味合いを帯びていること、物語の要所で効果的に使われていること、「密通」という物語の主題に関わることという三点において、文学的にも大変興味深い表現である。

5.6 「よその思ひやり」

次に挙げる一文は、柏木が小侍従の手引きによって初めて女三の宮に接した場面であり、柏木の心中を語ったものである。文頭の「よその思ひやり」という表現はなかなか解しがたい。

- (32) よその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推しはかられたまふに、ただかばかり思ひつめたる片はし聞こえ知らせて、なかなかかけかけしきことはなくてやみなむと思ひしかど、いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつ

かしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。(源氏物語、若菜下 4-225)

初めに、単語の辞書的な意味を確認する。「思ひやり」は「他人へのあたたかい配慮」という意味のほかに、「想像すること、推測」の意がある。「推しはかられたまふ」と続くので、後者の意味で取るのが適切なところである。

「よその思ひやり」という連体修飾表現は『源氏物語』中に1例しかなく、『日本語歴史コーパス』に収録されている全時代の全作品にもほかに見当たらない。そこで、試みに『日本語歴史コーパス 平安時代編』で、「ヨソ+ノ」の後ろにどのような名詞が来ているかを見ていくと、「よその思ひ」という類似の表現が見つかる。

(33) 昔の心ならましかば、うたて心劣りせましを、今は、世の中を、みなさまざまに思ひなだらめて、(源氏)「とあるもかかるも、際離ることは難きものなりけり、とりどりにこそ多うはありけれ、よその思ひはいとあらまほしきほどなりかし」と思すに(源氏物語、若菜上 4-74)

これは(32)の一つ前の帖のことであり、女三の宮を妻に迎えることとなった源氏が、実際に接してみても幼稚な有様に落胆するが、『よその思ひ』では妻として理想的なのであるよ」と自らに言い聞かせているところである。(32)と(33)に共通するのは、「対象(女三の宮)に接した後の実感」に対比されつつ「よその思ひ(思ひやり)」の内容が述べられている、ということである。すると、「よその思ひ(思ひやり)」とは、具体的には「直接その対象に接する前の、はたからの想像」、「その対象に直接関わらない第三者としての想像」のことだと考えられる。

「よその思ひ」、「よその思ひやり」という「連体修飾句―体言」の構造に関連して、「連用修飾句―用言」の構造を持つ「よそに思ふ」、「よそに思ひやる」という例に目を向けるとどうであろうか。『日本語歴史コーパス 平安時代編』に「よそに思ふ」は3例(全て源氏物語)、「よそに思ひやる」は2例(全て源氏物語)存在する¹⁰。(32)・(33)に関係のある例を挙げる。

(34) (中の君)「およばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことをうちとけのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。(源氏物語、橋姫 5-140)

(35) (中の君)「…よそに思ひきこえしは、ましてこよなく遥かに、一行書き出でたまふ御返り事だにつつましくおぼえしを、久しうとだえたまはむは、心細からむ」と思ひなら

るも、我ながらうたてと思ひ知りたまふ。（源氏物語、総角 5-283）

(34)は薫が中の君たちを垣間見る場面であり、「よそに思ひやりしには似ず」（直接見る前の想像とは違って）、今は深い親しみを覚えたということである。(35)は中の君の心中である。自分に関わりのない方として匂宮のことを想像していたときは遙かに遠い存在であったが、逢瀬の後には「訪れが途絶えたらさぞ心細いだろう」と考えが変わってしまったことを言う。

以上の(32)から(35)では、想像と現実との差について言及されていたが、それは当時男性が女性にやすやすとは近づけず、異性に抱く人物像がしばしば評判や想像によって形成されるということを背景とするものであった。

6. 結び

本稿は古典文学作品のテキストを正確に解釈し理解することを目的とし、当該箇所と類似の表現を探するという手法に基づき、『源氏物語』のいくつかの例について具体的な手順を示した。一作品だけでなく同時代の他作品を調査対象に含め、作品間での表現内容の違いを検討することは、その表現が個々の作品内で有する特殊性・固有性の考察につながる。本研究が、古典文学作品の表現を味わう一助になることができるのなら幸甚である。

参考文献

今西祐一郎(1998)『源氏物語覚書』岩波書店。

小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院。

北山谿太(1951)『源氏物語の語法』刀江書院（本稿で参照したのは1997年クレス出版の復刻版である）。

北山谿太(1962)『源氏物語の新解釈』塙書房。

参考 URL

国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス 平安時代編』

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html>（2023年10月31日確認）

付記

本稿は日本語文法学会第23回大会でのチュートリアル「古典文学作品における日本語学と文学の接点」の発表を元にし、『日本語文法学会 第23回大会発表予稿集』に掲載された内容に大幅に加筆をしたものである。本研究は、国立国語研究所「通時コーパスプロジェクト」の成果の一部である。

- 1 各例は小学館『新編日本古典文学全集』から引用した。作品名の後の数字はページ数である。ただし、引用符などを一部追加し、動作主や会話主などを括弧で補ったところがある。
- 2 『源氏物語』の地の文、会話文でも古歌をふまえた表現が多く見られる。
- 3 語形「%ハズカシ」の後方 5 語以内に語彙素読み「ヒト」が出現するという条件で短単位検索し、目視で確認した。「%」は任意の文字列を表し、「%ハズカシ」によって「ハズカシ」だけでなく「モノハズカシ」や「ココロハズカシ」なども含めて検索できる。
- 4 語形「%ハズカシ」の後方 5 語以内に語彙素読み「マミ」が出現するという条件で短単位検索し、目視で確認。
- 5 葵の上は源氏より年上で、気位が高いことから、源氏は気詰まりに感じ、これまでは打ち解けられずにいた。
- 6 (11)は(8)よりかなり前の場面であるが、(11)を踏まえると、(8)での平生とは異なる葵の上の様子が一層よく理解される。
- 7 語形「ニクシ」の後方 5 語以内に語彙素読み「ココロ」が出現するという条件で短単位検索し、目視で確認。「心憎し」は「憎し」と意味が異なるところがあるので今回考察に含めていない。
- 8 残りの 1 例は、「またわづらはしきやたちかはりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。(源氏物語、葵 2-69)」という草子地であり、(源氏が他の女性と関係を持ち、) やっかいな方が代わりに現れるだろうかと考えることは「憎き心」であるよと評するものである。
- 9 短単位検索で、語形「オオケナシ」の後方 5 語以内に「ココロ」があるという条件。なお 1 例は連体修飾関係に無いので除外した。
- 10 短単位検索で、語彙素読み「ヨソ」をキーとし、キーの後方 1 語に語彙素読み「ニ」が、キーの後方 2 語に語彙素読み「オモウ」が出現するという条件で検索した。